

形而上学からメタ自然学へ

清水哲男 (Tetsuo Shimizu)

アリストテレス『形而上学』の原義は『自然学』の「後ろ」に置かれた書巻、のことであり、それを以下(古代的)メタ自然学と呼ぼう。それが日本語に翻訳された際に「形而上なる者は之を道と謂い、形而下なる者は之を器と謂う」という易経中の一文を借りて、形而上学とは「時間・空間の中に形をもつ感覚的現象として存在することなく、それ自身超経験的な、ただ理性的思惟によってとらえられるとされる存在」を論ずることを意味するようになった。しかし、イオニア自然学の伝統を結集し自らの著作に集大成したとみられるアリストテレスのメタ自然学において、超経験的なしかも理性的思惟によって「のみ」とらえられうる自然の内なる「存在」などが、果たして考えられえたであろうか。プラトンのアイデアでさえ、それが自然の事物から離れて存在することは(後期プラトンにおいては特に)はっきりと否定されており、自然の事物の内に分有される(自然の諸事物がアイデアをそれぞれに「分け持つ」)ことによってはじめて「存在する(現象する、働く、機能する)」とされる。アリストテレスはこのアイデアを、その原義に立ち戻ってエイドス(形相)と読み替えて、自然の事物の存在の4原因(質料因、形相因、動力因、目的因)の一つとなした。古代メタ自然学において既に、モノ・コト・コトバとして機能するモノは「ヒトの存在、ヒトの精神、思惟あるいはロゴス(言語)的活動をも含めて」全ては「自然・内・存在」だった。プラトンの『ティマイオス』では、ヒトの思考活動をヒトの頭部を周回する血流「血は、火の純粹態である光を含む」と考えられたから「の存在によって説明しているが、それは現代のコンピュータが「思考する」ことが電子回路の内を電磁波(光)に駆動される電子たちが周回することによって説明されることと見事な類比をなしている。アリストテレスの古代的靈魂(プシュケー)は、植物的靈魂、動物の靈魂、人間的(ロゴスの、理性的)靈魂に分類されるが、すべては自然の内なるモノとして考察されている。しかるにデカルトに始まる近代自然学は、自然を超越するとされる神的な存在を説くスコラ学すなわち中世的に変容された『形而上学』の伝統と、新興する市民階級によって産み育まれた「(自然学的知識を基盤とする)技術システム」の存在との、二つに引き裂かれることになった。すべてのイノチあるモノ、ココロあるモノをその内に産み育ててきたはずの自然が、デカルトの心身二元論によって、自(ら)動(くモノ)ですらないような単なる「静」力学的機械からなる自然と、自然を超越し創造しゆえに支配するとされる神および神によって吹き込まれたヒトの精神とに、モノとココロとの二つの全く異なる実体とに、分裂し対立してしまったのである。かくして、近代自然学は、外力によってのみ駆動されうるようないわゆる「死せる物質」のみからなる自然をのみ対象とする学、と一方的に規定されてしまった。自然とヒトの精神との対立がここに始まる。これでは「死せる物質」がイノチあるモノを作り出すメカニズムまでもが「永遠の謎」あるいは神秘ともなってしまう。そして、精神をもつヒトと、精神を全く持たないとされるヒト以外のいわゆる「無」生物をも含む動物との間には越えがたい溝が作り出されることにもなり、ここにライルのいう「機械の中の幽霊」現象までもが発生することになった。

こうした自然とヒトの精神との対立が、ようやく解決の兆しを見せ始める契機が、ダーウィンの進化論の発表であった。ヒトが、ヒト以外の動物たちの間「から」つまり自然「から」進化してきたのであるならば、自然とヒトのみが持つとされる精神との間には - 「もし」ヒトが、自然の全体をヒトのロゴスにおいて解明できるとする「ならば」 - 人知によって越えがたい断然はありえず、そこには必ずやヒトにとって理解可能な連続性があるであろう。ましてや、自然に遍満している「死せる物質」と、その自然が生みだし進化せしめてきたイノチあるモノとの間に、自然のロゴスを知悉するヒトにとって、全く理解不可能な越えがたい断絶などがいかにありうるであろうか。現代に至っては、イノチなきモノ(「死せる物質」)とイノチあるモノとの境界、そしてヒトのココロなきモノとヒトのココロあるモノとの境界とは、ますます「あいまい」になりつつあることに気づく。「もし」アリストテレスが、現代の自動車を見たら、そこには動物(自ら動くモノ)的靈魂(プシュケー)がある、というだろうし、コンピュータを見たら、そこにはヒトのロゴス(理性)的靈魂がある、というのではないだろうか。進化論が現代的な自然学に根拠を得始めたのは、しかし、ようやく 20 世紀の後半になってからのことだった。それに先行して 20 世紀の前半は、物理学(physics<physis の学つまり自然学)の世紀と呼ばれ、極小のマイクロコスモスの領域の素粒子の動力学的メカニズム(ダイナミズム)が自然法則として明らかにされはじめ、そのダイナミズムが極大のマクロコスモスである全宇宙に至るまで、完全に浸透していること、具体的にいえば(一般)相対論と量子力学を二つの柱とする自然法則が「ほぼ十全に」成立していること、が次第に明らかにされはじめた。これに並行して、その自然法則を用いて、生命の存在が、DNA に書き込まれたゲノム情報に淵源をもつことも、生命進化の源泉はゲノム情報の発現であるところの動力学的ハイパーサイクル・システム(dynamical hyper-cycle system)の存在にあることも、また次第に明らかとなってきたのであった。いまや、極小のマイクロコスモスの階層から極大のマクロコスモスに階層に至るまで、動力学的ハイパーサイクル・システムの存在、そして、それらの自己創造的な進化の結果として説明不可能なモノは - 少なくともこの自然の内には - <全く・何も・ない>までになった。いわんや、極小のマイクロコスモスと極大のマクロコスモスの中間の階層の存在であるところの、この地球上のイノチあるモノ、そしてココロあるモノの存在においてをや。今や、ヒトの病気の動力学的ハイパーサイクル・システムによるシミュレーションさえ、原理的には可能になろうとしている。かくして、論理的原子・ロゴスの的に<不可分なるもの>、幾何学的「点」に対応する「閉図形」、空集合をのみ要素として含む集合・を個々の動力学ハイパーサイクル・システムに対応させ、論理的空間・ロゴスの的に<空なるもの>、幾何学的「空間」つまり「開図形」であり、自己「非」同一的集合つまり無限集合・を動力学的ハイパーサイクル・システムの存在の全ての論理和によって構成される時空(space-time)上の「場(field)」に、それぞれ対応させることに着々と成功しつつあるところのわが動力学的ハイパーサイクル・システム論は、現代メタ自然学としての資格をここに得て、自然学・自然のロゴスを探求しようとする諸科学-および自然・内・人間学-自然の事物の一部としてのヒトのロゴスを探求しようとする諸科学-を基礎付けて、それらを橋渡しする、自然・内・人間学を包摂する広義の全自然学の基礎学、と再び<なる>ことが<できる>、と思われるのである。